歴史系博物館の特色を活かした子どものための住まい学習の実践
ー大阪市立住まいのミュージアムの常設展示室を活用した居住文化体験プログラムー

Practical Study of the Housing Education for Children Using the Museum of History
ー A Case Study of Housing and Living Culture Program in OSAKA Museum of Housing and Living ー

○碓田智子※1、増田亜樹※2、新谷昭夫※3、谷直樹※4
USUDA Tomoko, MASUDA Aki, SHINTANI Akio, TANI Naoki

In this paper, we examined the learning support activities and building materials in the museum of history from the point of housing education. Moreover, we practiced the model programs of housing education for children in Osaka museum of housing and living, and tried to examine the effects of learning. The results are as follows. 1)It was clear that the museum of history have large stocks of teaching materials about housing education. 2) We made some model programs and found that it is important for the museum of history to make the way that the variety of generation can learn traditional housing culture together.

キーワード：歴史系博物館、住まい学習、居住文化、子ども
Keywords: The Museum of History , Housing Education, Housing and Living Culture, Children

１．はじめに
1-1. 研究の背景と目的

平成 20 年度の社会教育調査（文部科学省）によると、わが国の博物館総数（博物館類似施設を含む）は 5,775 館にのぼっている。博物館の館種は、総合博物館、歴史博物館、美術博物館、野外博物館、動物園、水族館など９種に分類される。本研究では、歴史博物館と歴史展示を持つ総合博物館を歴史系博物館とするが、それらは合わせて 3300 館を越え、博物館全体の約 57%を占める（図１）。全国に多数設置されている歴史系博物館には、地域の民家の再現展示やミニチュア、歴史的町並みの模型、あるいは昔の住生活に関わる実物資料が豊富に展示され、住まい学習の教材として活用することが期待できる。

住まいや住生活の変化とともに、日本の伝統的な住まいやくらしの文化が姿を変え、または失われようとしている今日、日本の住まいのアイデンティティである居住文化を次世代へ継承する仕組みづくりが重要な課題となっている。学校教育においても、新学習指導要領[文1)]にみられるように、伝統・文化を尊重することが各教科や活動で見直されている。しかし、都市化が進んだ大都市

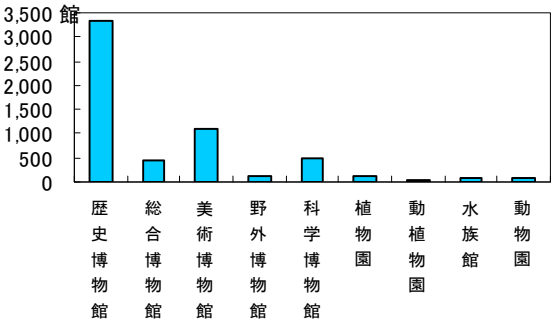

図１　博物館施設の館数（H20 社会教育調査）

では、子どもたちが実物に触れて、住文化を体験的に学習する場を得ることは困難になっていると考えられる。そこで、民家等の再現展示や豊富な実物資料を持つ歴史系博物館を、住まいの体験学習の場として活用できないかというのが、本研究の意図するところである。

筆者らは 2003 年から、全国の歴史系公立博物館を対象に学習支援や展示について訪問調査を行ってきた。その結果、歴史系博物館は小学校３・４年生社会科の「昔のくらし」の学習、小学校高学年や中学校・高校での歴史学習としての活用が多く、住まいの体験学習の場として活用しようとする意識は殆どないようにみられた[1)]。

そこで本稿では、住まい学習の視点から、全国の歴史

*1 大阪教育大学教育学部、教授、博士（学術）　Prof., Faculty. of Education, Osaka- Kyoiku University, Ph.D.
*2 大阪人間科学大学人間科学部、助教、修士（学術）　Assistant, Osaka University of Human Sciences, Master of Arts
*3 大阪市立住まいのミュージアム、副館長（学芸員）、工博　Curator, Osaka Museum of Housing and Living, Dr. Eng.
*4 大阪市立大学大学院生活科学研究科、教授、工博　Prof., Graduate School of Osaka City University, Dr. Eng.

系の公立博物館における学習支援活動と建築展示の特色を把握する。また、得られた知見を踏まえて、大阪市立住まいのミュージアムの常設展示室で、個人来館の子どもを対象に、居住文化を体験的に学習できるプログラムを実践し、子どもの関心を引き出せたかについての検証を試みる。以上を通じて、歴史系博物館の特性を活かした住まい学習の提案につなげることを目的とする。

1-2. 本研究に関わる既往研究

本研究に関連する既往研究は、一つには建築学・住居学からのアプローチ、いま一つには博物館の学習支援に関する研究がある。

住居学領域における住まい学習の視点から博物館の資料の活用に着目した先駆的研究としては、1994 年の遠州氏による研究[文3)]が注目される。典型事例の資料紹介が中心であり、また居住文化に限定せず、家庭科教育での博物館の利用に主眼が置かれているが、本研究につながる視点を持つ研究といえる。歴史系博物館の建築資料に着目した研究では、早川氏らによる研究[文4)]があるが、博物館としての資料収集や管理・展示への活用を目的としている。また、建築分野で博物館と子どもの学習に関連した研究は、みつはま子ども博物館、堤町まちかど博物館の事例など、まちづくり学習に視点が置かれている[文5)6)]。

一方、博物館の学習支援については、歴史系博物館の展示を活用した子どもの学習指導に関する研究[文7)]に、子どもが見学するときの探求テーマの一つに、住居についての課題設定も可能であると指摘されているが、具体的な住まい学習に言及するものではない。また、昭和の日常生活をテーマに情景再現した展示室と豊富な実物資料を持つ北名古屋市博物館では、その展示を活用して、子どもたちが暮らしの文化を学ぶ学習支援活動や学習資料づくりが行われている[文8)]。それらの中には住まい学習に関わる視点がみられるものの、住まい学習として実践・検証されてはいない。その他にも、歴史系博物館の研究紀要等で、子ども向け学習支援活動が報告されているが、筆者らの把握した範囲では、住まい学習の視点は少なく、また活動報告的な内容にとどまっている[2)]。本研究は、歴史系博物館の学習支援活動を住まい学習の視点から洗い出すとともに、そこで得られた課題に対応した体験学習プログラムを提案・実践すること、その検証を試みる点に特色がある[3)]。

２．研究の方法

本研究は、全国の歴史系博物館を対象としたアンケート調査等とその結果を踏まえた教育実践による。

1)歴史家博物館における学習支援活動の課題の把握検討

2006 年８月に、都道府県、政令指定都市、県庁所在地都市、中核市および東京都特別市が設置した歴史系公立博物館（109 館）を対象に、学習支援活動の実態を把握するためのアンケート調査を行った。調査票の回答は学芸員に依頼した。回答博物館は 99 館（回収率 90.8%）であった。この調査結果から、歴史系博物館の学習支援活動の特色を把握・検討した。また、同時に各歴史系博物館に依頼するなどで収集した子ども向け学習資料の内容を、住まい学習の視点から分析した。

2)住まい学習の教材としての建築展示物の検討

筆者らは 2003 年以降、歴史系博物館を対象に建築展示の調査[4)]を行っている。本稿では、訪問調査を行った 82 館のうち、78 館で確認できた合計 406 件の建築展示物の内容を住まい学習の教材の視点から検討する。

3)上記 1)2)で得られた課題を踏まえ、大阪市立住まいのミュージアム（愛称　大阪くらしの今昔館）の常設展示室を活用した、個人来館の子ども向け居住文化体験プログラム[5)]を提案・実践し、体験イベントが居住文化への子どもの関心を引き出せるのかについて検証を試みる。

３．歴史系博物館にみる学習支援活動の傾向と建築資料

3-1. 歴史系博物館の学習支援活動の概要

アンケート調査への回答博物館 99 館のうち、調査前年度（2005 年）の来館者数およびその内訳が明らかになった博物館は 31 館であった。来館者（学校団体を除く）の年齢構成は、小・中学生が 22%であった。高校・大学生が占める割合は全体の５%にすぎず、一方、65 歳以上の高齢者は全体の 20%を占めていた。つまり、小・中学生と高齢者で歴史系博物館来館者の 40%以上を占めている。また、歴史系博物館に来館する学校団体の内訳は、小学校が約 70%、中学校約 20%で、高校や大学は少なかった。歴史系博物館の利用は、個人来館、団体見学のいずれにおいても、子ども、特に小学生のウエイトが高いことがわかる。

博物館の子ども向け学習支援は、来館者層に対応して、学校団体の見学向けと個人来館者向けに、多彩なプログラムが設けられている（表１、表２）。学校団体向け支援は 99 館のうち 96 館で、また個人来館の子ども向けは 92 館（93%）と、殆どの博物館で実施されていた。学校団体向けには見学時のガイドや学校への講師派遣が多く、個人来館の子ども向けにはものづくりや体験学習が中心である[6)]。ものづくりは土器や勾玉づくり、体験学習に

表１　学校団体向け学習支援(N=99)

学校団体向けの学習支援	館数	%
団体見学時のガイド	86	86.9
学校への講師(学芸員)の派遣	64	64.6
団体見学時の体験プログラム	52	52.5
学校教員向け手引きの配布	48	48.5
学校等への資料の貸し出し	46	46.5
学校教員向けの講座・講習	45	45.5
移動博物館	17	17.2
その他	13	13.1
特になし	1	1.0

表２　個人来館の子ども向け学習支援（N=99）

個人来館の子ども向け学習支援	館数	%
ものづくり	76	76.8
体験学習	72	72.7
博物館たんけん、博物館ガイド	40	40.4
お話や紙芝居、ビデオ	34	34.3
その他	19	19.2
特になし	7	7.1

表３　学習支援に利用する場所（N=99）

	館数	%
講堂	52	52.5%
常設展示室	48	48.5%
研修室	41	41.4%
野外	40	40.4%
企画・特別展示室	36	36.4%
体験学習コーナー	21	21.2%
実習室	17	17.2%
視聴覚コーナー	8	8.1%
収蔵庫	6	6.1%
図書情報(閲覧)室	5	5.1%
その他	16	16.2%

着物の着用体験など生活関係が多くみられる[7]。

学習支援の実施場所は全体として講堂が最も多く、ついで常設展示室、研修室と続く（表３）。その内容をみたところ、常設展示室で実施されているのは展示ガイドやスタンプラリーが多く、常設展示室を学習支援活動の場として能動的に活用している博物館は少数であった。

3-2. 住まい学習の視点からみた歴史系博物館における子ども向け学習資料の検討

アンケート調査の対象とした全国の歴史系博物館 109 館および野外博物館５館のうち 95 館から、子ども向け学習資料（ワークシート、ガイドブック、リーフレット、展示解説シートなど）を収集することができた。その中身を検討したところ、74 館の学習資料に住まい学習の内容が含まれていた。

住まい学習の内容は、表４の９種類に大別できる。最も多くとりあげられているのが、「昔の生活道具」に関する内容である。これは、小学校３・４年生社会科の「昔のくらし」の単元に関連している[8]。この学習に含まれる「昔の生活道具」「昭和のくらし」「電化製品」を合わせると、74 館中、67 館（89%）に掲載されており、質・量ともに最も充実している。火鉢・炭アイロン・ひき臼・氷冷蔵庫などの昔の生活道具、戦前から戦後にかけて一般家庭に普及しはじめた頃の電化製品が写真やイラストで示されている。それらを展示室で確認することを通じて、くらしの移り変わりや現在の生活との違いを子どもに気づかせる内容となっている。しかし、道具類は単体で示されることが多く、昔の道具が使われていた空間、つまり生活の器である住まいを含めた内容は少ない。

また、「地域の民家」は 32 館、「古代住居と生活」は 30 館と、比較的多く取り上げられている。これは後でも述べるが、歴史系博物館の民家や竪穴式住居などの建築展示物と関係している。民家の実物展示がある博物館では、民家の構造や部材、材料、屋根形式、建具など建築に関わる内容を盛り込んだガイドブックやワークシートなどが作成されている。地域の民家は、博物館が立地する地域の民家形式について、その特色を学ぶものである。小学生向けの文章表現になっているが、内容的には建築を学ぶ高校生や大学生の基礎教育にも活用できるレベルのものもみられる[9]。

表４　子ども向け学習資料の内容分類（N=74）

内容	館数	%
建物のつくり	12	16%
建物の一部	15	20%
地域の民家	30	41%
古代住居と生活	32	43%
中世～近世の町並みと暮らし	24	32%
昔の生活道具	39	53%
昭和の暮らし	15	20%
電化製品	13	18%
その他	4	5%

「建物のつくり」：建築用語を使い、屋根のかたちや柱の建て方、構造材など
「建物の一部」：建物の名前や柱や壁の色、古代寺院の瓦など
「地域の民家」：地域の民家の特徴について
「古代住居と生活」：竪穴式住居の内部の様子や縄文時代の人々の暮らしなど
「中世～近世の町並みと暮らし」：武家屋敷や町家、城下町と人々のくらし等
「昔の生活道具」：かまどや火ばち等の道具の特徴や使い方など

このように、歴史系博物館の子ども向け学習資料には、住まい学習に関連する幅広い内容が含まれている。しかし、展示を見て名称等を確認する内容が多く、また生活道具類が、それが使われていた住空間と切り離されて扱われるなどから、必ずしも住まい学習を意図して作成されているわけではないと考えられる[10]。

3-3. 住まい学習の視点からみた建築展示物

訪問調査を行った 82 館の歴史系博物館のうち、78 館の常設展示室に合計 406 件の建築展示物（模型等）が確認できた。その種類は、①竪穴住居・農家・町家・洋館や町並みなどの住居系、②都城・城郭など、③寺院・神社、④学校・駅舎などの公共建築、⑤工場や銀行などの商工系、⑥その他に大別される（図２）。住居系が過半数を占めることは、住まい学習の教材として活用の可能性が示唆される。

建築展示物は、図３に示すように、1/10、1/50、1/100 などの縮尺によって作られている。なかでも実物大を示す 1/1 は、111 件と全体の４分の１以上を占める。実物大の建築展示物では、空間体験が可能となる点が注目される。また、1/10 の縮尺では建物のつくりが細部まで表現される。1/10 から実物大（1/1）までの縮尺で作られたものが全体の３分の１以上を占め、しかもそのうちの６割近く（91/154 件）は住居系の展示物である。

博物館の建築展示物は古くからみられる。既に 1970 年頃には実物大の建築の中に道具類を展示する方法がみられたが、農家展示が中心であった。1980 年代にはいると、農家以外の住宅でも実物大の再現がみられるようになった。1982 年開館の神戸市博物館では、近代の居留地の生活が実物大で再現されている。80 年代の後半には展示室を大きく使って町並みを再現し、家の中に生活道具などを展示する情景再現の手法が導入される。実物大で再現された近世深川の町並み（深川江戸資料館・1986 開館）や、中世草戸千軒の集落（広島県立歴史博物館・1989 開館）がその例である。また、2000 年に開館した新潟県立歴史博物館では、実物大で再現した高田の雁木通りに人形を配置し、通りを中心にした除雪風景と、雑貨屋、駄菓子屋などの店舗風景が詳細に表現され、その中を見学できる。

常設展示室の建築展示が大型化する傾向がある中で、

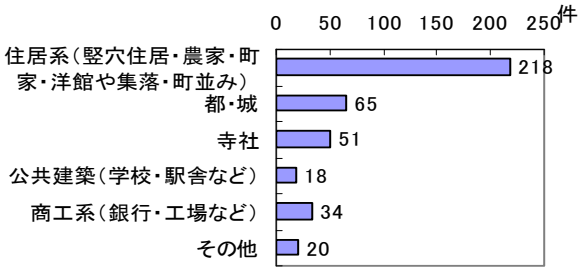

図２　歴史系博物館の建築展示の種類（78 館について）

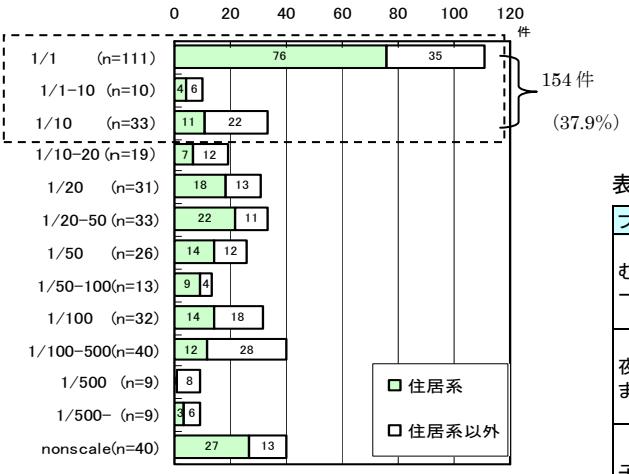

図３　歴史系博物館の建築展示の縮尺（N=406）

人形や道具を置いて当時のくらしを詳細に表現する情景再現展示が注目される。空間を体感できる情景再現展示は、住まい学習の教材として多様な活用が期待できる。

４．歴史系博物館を活用した子ども向け住まいと暮らしの体験学習プログラムの実践と評価

4-1. プログラムのねらいと検証方法

先に述べた調査結果から歴史系博物館の学習支援に関わって、1)歴史系博物館は子ども（特に小学生）と高齢者の利用が多いが、高校・大学生の利用者は少ないこと、2)小学校中学年社会科の「昔のくらし」学習に対応した体験学習等がなされているが、昔の道具類が使われていた住空間を含めた内容にまで充分踏み込まれていないこと、3)近年の歴史系博物館の常設展示室は、情景再現展示も増加しているが、常設展示室が学習の場としてあまり活用されていないこと、が課題としてあげられた。さらに、博物館の体験学習は、単発的で多様な子どもを対象とするため、評価研究が困難である。

このような課題を踏まえて、筆者らは江戸時代の町並みと暮らしを実物大で再現した展示室を持つ大阪市立住まいのミュージアム[11](以下、住まいのミュージアム)で、個人来館の小学生向けに、表５に示す場面の異なる３つの居住文化体験プログラムを子どもイベントとして実施した[12]。いずれも、江戸時代の町家を再現した空間の中で、昔の生活の疑似体験を通じて居住文化に関心を持ってもらうことがねらいである。

学校団体見学の場合とは異なり、イベントに参加する多様な子どもを対象とする調査は困難であるため、簡単な質問紙や感想文、絵日記などによって、子どもが体験を通じて、居住文化に関心を持つことができたかについて検討した。

4-2. 昔の住まいとくらし一日たいけん

1) プログラムの目的

障子を貼り替える、座敷をほうきやはたきで掃除する、季節に応じてしつらいを替えるなど、かつてはごく普通にみられた日常生活の光景が、現在では珍しく懐かしい

表５　居住文化体験プログラム

プログラム名	内容	実施日	対象者
むかしの住まいと暮らし一日たいけん	昔の子どもの一日の暮らしを疑似体験する	2007年８月22・23日（13:30～20:00）	一日につき、小学生と保護者25組
夜の町家の暮らしとお泊まり体験	町家で夜から朝まで一晩を体験する	2008年11月８・９日（17:30～21:00）	小学生と保護者30組、うち宿泊体験は10組
子どもあきんど体験	町家であきんどの暮らしを体験する	2009年４月１・２日（10:30～16:00）	一日につき、小学生20名（保護者は自由参加）

ものになっている。プログラムの第一の目的は、こうした居住文化を子どもたちに情景再現型の常設展示室の中で、身体を使って疑似体験してもらうことである。

またこのプログラムでは、歴史系博物館の利用が少ない大学生と博物館の連携のあり方を探ることも意図し、子ども（および保護者）、大学生、高齢者の多様な年齢層が相互交流し、教え合い、学び合うという、異世代間で居住文化を伝承する仕組みづくりを試みた。住まいのミュージアムのボランティアも他館同様に高齢者が多いので、生活経験豊かなボランティアが障子貼りなどの体験メニューの実施に必要な技術を大学生に指導し、さらに大学生が先生役となって子どもや保護者に教えることを目ざした（図４）。

2) プログラム作成のプロセスと学習資料

学生スタッフは、大阪教育大学と大阪市立大学の学生にモニターとして協力してもらった[13]。プログラム実施の４ヶ月前から学生と住まいのミュージアム学芸員らが加わって検討を重ね、最終的には表６に示す９つの体験メニューを実施すること決まった。この中には、学生のユニークな発想により提案された肝だめしも含まれている。各体験メニューの具体的な実施方法についてはボランティアからアドバイスを受けるとともに、学生に障子貼りや着付け、竹細工などの技術を指導してもらった。

一方、それぞれのメニューには、学校の授業づくりと同様に、①各体験メニューの時間配分と組み立て、②子どもに学んでもらいたい内容、③学生が指導するときの留意点など、学習指導案に準じるものを作成した（表７）。さらに指導案に基づいて、「一日たいけん学習ノート」「まち探検シート」「修了証書」「絵日記シート」などの教材を作成した。「一日たいけん学習ノート」は、子どもたちがプログラム終了後に家族と話をしたり、反復学習をするのに役立つものである。また一緒に参加した保護者にも感想を記してもらう「感想シート」を作成した。さらに、このプログラムで学んだことが子どもの日常生活につながったかどうかをみるために、プログラム終了後に家庭での子どもの様子を書いてもらう保護者用のシートも準備した。

プログラム当日は、学生 14 名が中心となり、タイムスケジュールに従って、９つの体験メニューを一日のくらしの流れに沿って連続的に実施した（写真１）。体験メニューのお茶会や障子貼りなどで、子どもへの技術指導は、すべて学生が担当した。参加した子どもには浴衣を着てもらい、昔の子どもになった気分で体験してもらった。

3) 子どもの体験学習の受け止め方について

肝だめし終了後、子どもに体験全体の感想を学習ノートに記入してもらったところ、98%の子どもが肝試しのことを取り上げた（図５）。他の体験の感想も多数みられたが、肝だめしの興奮がまだ続く中で感想を書いてもらったので、その刺激が非常に強かったと考えられる。一

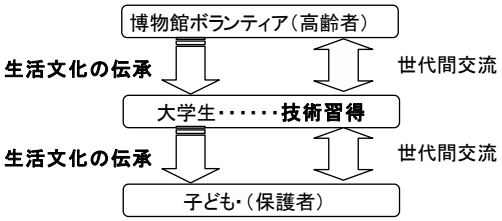

図４　世代間交流と生活文化の伝承

表６　プログラムの体験メニュー

体験メニュー	主旨
1. 浴衣の着用	浴衣を着て昔の子どもの気分で一日を過ごす
2. まち探検	むかしの住まいや町並みを体感する
3. お茶会	座敷に座って、お作法を体験する
4. むかしの遊び体験	むかしの遊びを楽しながら、交流する
5. 竹細工	建築や生活用品に使われる竹の性質を学ぶ
6. 町家のお掃除体験	座敷ほうきやはたきの使い方を学ぶ
7. 障子貼り体験	障子貼りを通じて、住宅のメンテナンスを知る
8. むかしのおやつ	素朴なおやつを味わう
9. 肝試し	電灯のない時代の町の暗さを体感

表７　プログラムの指導案の例（障子貼り）

障子張り【20】

区分	内容	学習目標	指導上の留意点	準備物
導入 （5）	1. 学生自己紹介 たすきがけの説明	担当者の話から、障子張りの内容を把握する たすきがけの仕方を習得する	エプロンとたすきを配り、たすきがけの方法を見本を見せながら説明する	たすき エプロン
展開 （5） （10）	2. 障子について（障子の張り方） 3. 障子の紙を張る	障子の歴史や張替えの方法を知る 自分で障子紙を張り、メンテナンス方法を知ることで何度も新しくなる障子の利便性に気づく	やり方の見本を見せながら障子の役割や張り替えの方法を説明する やり方が正しくできているか確認しながらできていないところを補助する 着物が汚れないよう配慮	障子紙・障子・のり・はけ・霧吹き

写真１　体験メニューの様子
左上　まち探検
右上　座敷でお茶会
左下　町家のお掃除
右下　障子貼り体験

方、保護者の感想には、「親もしたことがない事が体験できるのがおもしろかった」などが見られた。子どもを対象としたプログラムであったが、障子貼りなどは、小学生の保護者にとっても初めての体験だったことが窺えた。

このプログラムでの体験が子どもの日常に影響を与えたのかをみるために、１週間後、子どもには絵日記を、保護者には自宅での子どもの様子を書いてもらった。絵日記の絵と文章に表現された内容をみると、体験直後の感想でほとんどの子どもが書いていた肝だめしは 40%に減少し、その分、浴衣や竹のお箸づくり、障子貼りなどの体験の記述が増加した（図６）。また、保護者に書いてもらった自宅での子どもの言動には、「家に障子がないので昔の人は大変なことをしていると関心していました」「ここのほこり、はたきがあれば届くのに・・・、家にないの？」などがあり、今回の町家のくらし体験が子どもたちに受け止められ、日常生活にフィードバックさせるきっかけになったことが窺える。

4-3. 夜の町家のくらしとお泊り体験

1) プログラムの内容

翌年に、先のプログラムを発展させて実施したのが、「夜の町家で昔の住まいと暮らしのワクワクたいけん」である。「むかしの住まいと暮らし一日たいけん」が昼間の町家を舞台にしたプログラムであるのに対し、このプログラムは夜の町家や町を舞台とするものである。参加者は小学生 37 人、保護者 31 人の合計 68 名であった。この参加者のうち 10 組の親子には、展示室内の再現町家でのお泊まり体験に参加してもらった。

夜の町家のくらし体験では、まず町家の座敷で、銘々膳を使って夕食を食べてもらった。食事の中では、箱膳の使い方などの解説もおこなった。からくり人形芝居の見学後には、閉館後の展示室内を提灯を持った子どもに「火の用心」の声とともに、拍子木を打ちながら夜回り体験をしてもらった。途中に立ち寄った町家では、「すりあげ戸」など町家の戸締まりの工夫を体験してもらい、また町家の中では、座敷の建具や昔の生活道具の体験学習も合わせておこなった（表９、写真２）。これらの体験メニューは、大学生とボランティアが担当し、夜回りの中では、学生が扮したネズミ小僧も登場した。

終了後、子どもに実施したアンケート調査では、どのメニューにも子どもの満足度が概ね高かったが（図７）、特に高学年で印象が強く、「むかしはいまより暗かったのでびっくりしました」などの感想が寄せられた。

2) 宿泊体験

お泊まり体験では、10 組の家族ごとに町家の座敷などに分かれて翌朝まで宿泊してもらった。終了後、保護者に子どもの様子などを記述してもらったところ、「町家の夜回りや宿泊は、日常の生活やホテルの宿泊では味わえないことで、子どもも関心をもてた」「昔の夜の暮らしは照明が少ないため薄暗く、現在と比べ不便であったことは実感できたようです」「普段の生活では、伝統的な住まいやくらしの文化にふれる機会はなく、今回のようなお泊り体験は大変貴重だと思います」など、全ての保護者が子どもにとって伝統的な住まいを体験する機会になったことを記していた。

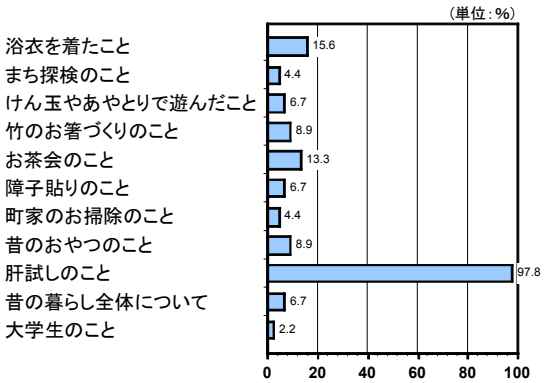

図５　体験直後の子どもの感想（N=49）

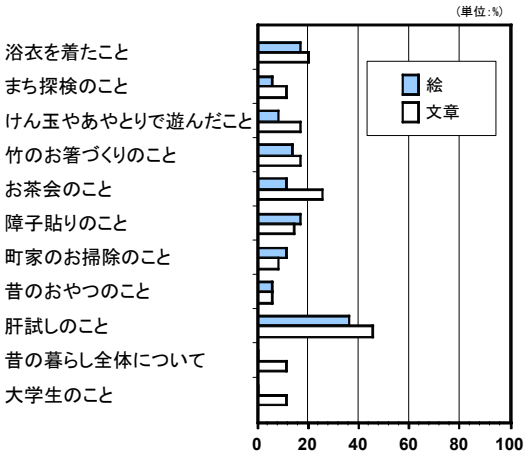

図６　絵日記にみる子どもの感想（N=36）

表９　夜の町家とお泊まり体験のプログラム

体験メニュー	主旨
1. 町家で食事体験	町家の座敷でめいめい膳による食事を体験
2. からくり人形	昔の職人芸を知る
3. ナイト町家ツアー	昔の夜の町の暗さ、町家の戸締まりの工夫を知る
4. 住まいのしつらい	座敷の建具のしくみ、座敷飾りなどを学ぶ
5. 昔の室内遊び	紙相撲遊びなど
6. 宿泊体験	町家の座敷などに泊まり、町家の空間を体感してもらう

写真２　夜の町家たいけんの様子
（左　町家での食事　　右　夜回り体験）

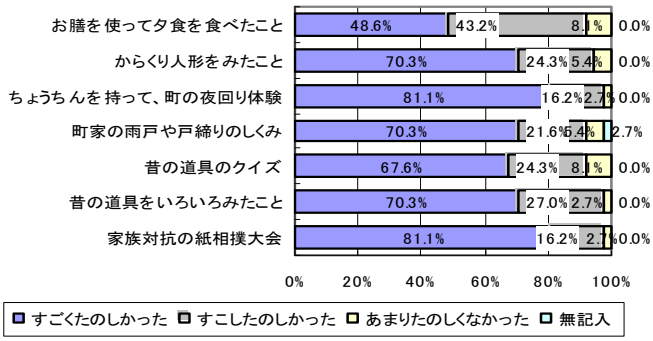

図７　夜の町家のくらし体験への子どもの評価（n=37）

宿泊を伴う体験プログラムは、受け入れ可能な人数が限定され、スタッフの負担が大きいことや安全性の確保などの課題もあるが、町家での住空間を特別に体感できた点で参加者の満足度が高かったと思われる。

3)絵日記にみる子どもの印象

参加した子どもに１週間後、絵日記に書いてもらったところ、23 名分が集まった。内容は 23 名中 7 名（30%）が夜回りとネズミ小僧の絵を描き、以下、夕食 5 名(22%)、からくり人形２名（9%）などが続いた。ここでは、これらの絵日記を通じて子どもの印象分析を試みた。

まず、画面中央いっぱいに大きな絵が表現されており、プログラムが及ぼした体験の強さと印象の大きさが窺えた。おもちゃや食事などのモノだけではなく、他の参加者や体験の主体としての自分など、人間の表現が多く、プログラムを通して大きな体験であったと分析される。町家体験では、夜道を逃げるねずみ小僧と町家の風景、提灯、拍子木など夜回りの絵が 30%みられた。電気のないくらし、町家の仕組み、防犯システム（鍵）、人的防犯ネットワークの組み込まれた町などが、子どもに印象深く受け入れられたと解釈される。このように絵日記には、プログラムが子どもにとって大きな体験で、特に町家体験を通じて江戸時代のくらしや町家の工夫などが印象として残っていることが表現されていた[14]。絵日記を画くこと自体が、体験の振り返りにつながったと考えられる。

4-3. 子どもあきんど体験

1)プログラムの内容

このプログラムでは、参加した子どもたちに半纏と前垂れを身につけ、あきんど姿に扮してもらった。商品の仕入れ、値札付け、町家のミセノマでの販売を疑似体験してもらうことで、町家が商いの場であることを体験的に理解してもらうことがねらいである。

先の２つのプログラムと同様に、大学生スタッフとボランティアに企画段階から入ってもらい、プログラム当日の運営に参加してもらった。プログラムでは、子ども

表 10　子どもあきんど体験のプログラム

体験メニュー	内容
1. 商いの準備	江戸時代のお金を知る・商品を仕入を知る・値つけ
2. 店の準備	半纏を着て、町家のミセノマに商品展示
3. 販売	ミセノマに座ってあきんど体験（約1時間）
4. 帳簿づけ	あきないの収支を行う

写真３　子どもあきんど体験の様子

たちは大学生やボランティアから教わりながら、販売体験だけではなく、商品の袋詰めや陳列、売り上げ帳簿の管理も行った（表 10、写真３）。

プログラムでは、館内通貨として実物の一文銭を使い、来館者には館内に設けた両替屋で両替して子どもたちの商品を買ってもらうなど、リアリティを演出した。また、商品の陳列準備の際には、子どもたちにミセノマやばったり床几について、その名称を教えるようにした。

2)子どもの感想

プログラム終了後に、子どもに書いてもらった感想文では、「昔の人がどうやって商売をしていたのかがわかった」「江戸時代のお金を使えた」「お客さんに買ってもらえてうれしかった。感謝の気持ちでいっぱいです」など、子どもたちには貴重な体験になったことが記されていた。子どもには販売体験での達成感が強かったようである。しかし、ミセノマ、ばったり床几など、町家の空間に関わる言葉は、子どもには聞き慣れない用語だったためか、感想文中には現れなかった。町家のくらしの体験であったが、子どもが町家にどの程度関心を持てたのかを感想文から把握することには限界があることが示された。

５．まとめ

本研究は、子どもたちが住まいやくらしを体験的に学べる場として全国に多数設置されている歴史系博物館に着目し、その特色や課題を把握した上で、歴史系博物館を活用した個人来館の子ども向けの体験プログラムを実践し、その検証を試みたものである。

1)歴史系博物館では子ども向け学習支援活動が充実しているが、住まいと暮らしの文化を意識的に取り扱うものは少ないことが明らかになった。一方、歴史系博物館には住居系の建築展示が豊富である。近年は情景再現型の

展示もでてきているが、建築展示を持つ常設展示室を活用した学習支援は少ないことが明らかになった。

2)上記の歴史系博物館の課題を踏まえ、本研究では、住まいのミュージアムの常設展示室を舞台に、子どもが、高齢者・大学生らの異世代と交流しながら居住文化を体験する学習プログラムのモデルを提示した。この主の体験イベントの評価は困難であるが、アンケートや感想文などを通じて、伝統的な住空間やくらしへの子どもの関心を引き出す役割を一定果たしたことが示された。一方、町家の空間にかかわっては、感想文等では検証が難しい点も明らかになった。

本研究では、博物館の展示室や建築展示のハードな資源に、高齢者や学生などの人的な資源を導入した居住文化体験学習を試みた。高齢者と同居する世帯が減り、家庭の中で住まいや暮らしの伝統文化を子どもたちに伝える機会が少なくなっている現在、歴史系博物館の実物資料や展示を活用して、多様な世代が交流する住まい学習のプログラムは、居住文化継承を補完する一手法になりうると考えられる。しかし、ソフトな人的資源が、子どもたちが居住文化に関心を持つ学習効果にどの程度寄与しているかなどについては、さらに実践を積んで検証していく必要がある。

＜注釈＞

1)対象とした博物館は、都道府県、政令指定都市、県庁所在都市、中核市および東京都特別区が設置した歴史系博物館で、調査博物館は 80 余館にのぼる。ここでの記述は、そのヒアリング結果による。調査結果の一部は、文献 2)に報告している。

2)博物館の学習支援はイベント型のものが多く、多様な子どもを対象とするので、評価自体が困難であることが、その要因と考えられる。

3)住まい学習からみた歴史系博物館における学習支援活動、および大阪市立住まいのミュージアムにおける学習支援活動報告については、各研究段階での研究成果を住まいのミュージアムの研究紀要・年報（文献 9）～12)）などに報告してきた。本稿はそれら一連の研究報告を基盤に、加筆・修正を加え発展させたものである。

4)展示内容を把握するため、展示レイアウトのスケッチ、写真撮影および学芸員へのヒアリングとともに展示内容がわかる図録や要覧などの収集をおこなった。なお、対象館については注 1）を参照。

5)学校団体見学に対応した住まい学習の実践については、文 13)に報告している。本稿では、学校見学対応よりも、時間的にも内容的にも自由度が大きい個人来館の子どもを対象とした。

6）さらに、2009 年度に、筆者らが把握できた小学校団体向け学習支援（下表）では、昔の生活道具の展示だけではなく、大豆などをひき臼で挽く、ポンプで水を汲む、糸を紡ぐなどの実体験ができる博物館が、都道府県立・政令指定都市の歴史系博物館 105 館のうち 41 館にのぼった。また、「昔のくらし」に関する企画展やスポット展示を行った博物館も 26 館（約 1/4）にのぼる。しかし、野外博物館を除き、多くは生活道具が単体で扱われている。生活道具が使われていた住空間を含めた体験学習プログラムを提供することが、本研究の特色である。

表　小学校向けの学習支援（2009 年度）　N=105

「昔のくらしと道具」に関する企画展・スポット展示	26館（24.7%）
出前授業	38館（36.2%）
資料貸し出し	31館（29.5%）
学校団体向け体験学習（歴史学習も含む）	41館（39.0%）
子ども向けWEBサイト（学習できるもの）	18館（17.1%）

7）65 館がボランティア組織を持っていたが、そのメンバーには高齢者が多いこと、ボランティアが特に一般来館の子ども向け講座の補助を担っているケースが多いことが特色としてあげられた。

8)扱われる時代は、主に小学生の両親と祖父母が子どもの頃である。また、実際の指導にあたっては、地域の博物館の活用や、高齢者から話しを聞くなど、具体的な展開が求められている。

9)例えば、宮崎総合博物館の「昔のくらしガイドブック」では、民家の断面図が描かれ、棟木、もや、垂木、根太など部材の名称がふりがな付きではあるが掲載されている。また、東北歴史博物館の「子ども歴史館」リーフレットは、継ぎ手や仕口のしくみが図で説明されている。江戸東京たてもの円のガイドブックも子ども向けではあるが、寄せ棟、入母屋など、民家の屋根形態を解説している。

10)各博物館の学芸員数とその専門分野（歴史、考古、民俗、美術工芸、教育普及など）について尋ねたところ、歴史および考古専門の学芸員がいる博物館は、それぞれ 80 数%を占めたが、建築を専門とする学芸員がいる博物館は５館（５%）にすぎなかった。建築専門の学芸員がほとんどいないことも、歴史系博物館の学習支援活動に住まい学習の視点が盛り込まれにくいことの背景にあると考えられる。

11)大阪市立住まいのミュージアムは、2001 年に開館した住まいとくらしをテーマにする歴史博物館である。近世展示室は、江戸時代の町並みを実物大でつくった情景再現展示を特色とする。近代展示室には戦前から戦後の大阪の町並み模型などを展示している。

12)プログラム参加者は、住まいのミュージアムのホームページやチラシ等によって一般募集した。2007 年と 2008 年のプログラムについては、大阪市立住まい情報センターのタイアップイベントに採択され、支援を受けた。

13)「夜の町家とお泊まり体験」「子どもあきんど体験」にも、大阪教育大学と大阪市立大学の学生にスタッフとして参加してもらった。

14)絵日記の分析には、臨床心理学を専門とする大阪市立大学・篠田美紀准教授からご指導をいただいた。

＜参考文献＞

文 1) 文部科学省小学校指導要領（1998 年 12 月告示、2002 年 4 月施行）

文 2)谷直樹・新谷昭夫・碓田智子、歴史系博物館を活用した住教育の現状と少子高齢社会における展開に関する実践的研究、（財）第一住宅建設協会　調査研究報告書、2007

文 3)遠州敦子、住教育のバックアップシステムの整理とネットワークの可能性の検討。平成５年度科学研究費補助金（一般研究（C））研究成果報告書、1994

文 4)早川典子・田中裕二、歴史系博物館と建築資料に関する研究－東京都内の建築関係資料収集・管理・展示・活用を中心に－、住宅総合研究財団研究論文集、36、pp. 399-410、2010

文 5)曲田清維、みつはま生活博物館における子どもと大人のパートナーシップ型まちづくり学習、「住まい・まち学習」論文集、（財）住宅総合研究財団、pp. 103-108、2000

文 6)田代久美ほか、まち探検型学習プログラムの効果的活用に関する研究「堤町まちかど博物館・堤焼佐大ギャラリー」の設立を事例として、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、pp. 779-780、2002

文 7)加藤公明、歴博ブックレット⑬　子どもの探求心を育てる博物館学習－歴博の展示を使った歴史学習・総合学習の指導法、（財）歴史民俗博物館振興会、2003

文 8)北名古屋市歴史博物館、博物館資料の資源化－昭和日常博物館の可能性－、北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要１、2007

文 9)碓田智子・大坂真奈美・新谷昭夫、住教育の視点からみた歴史系博物館における教育普及活動、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報２、pp. 29-36、2004

文 10）碓田智子・大北博子・大越慶美・増田亜樹・谷直樹・新谷昭夫、歴史系博物館を活用した学習プログラムの取り組み－全国の歴史系博物館を対象とした学習支援調査から－、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報５、pp. 13-22、2007

文 11）碓田智子・山中裕子・江川奈生・三瀬寛子・増田亜樹・新谷昭夫・谷直樹、タイアップイベント『むかしの住まいと暮らし一日たいけん』の実践と評価、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報６、pp. 22-32、2008

文 12）新谷昭夫・碓田智子・増田亜樹・篠田実紀、歴史系博物館の実物教材を活用した住まい学習の実践的研究、住宅総合研究財団研究論文集、36、pp. 375-386、2010

文 13）碓田智子・増田亜樹ほか、歴史系博物館における住文化学習プログラムの評価－大阪市立住まいのミュージアムの小学校団体向け学習支援を対象に－、日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系、50 号、pp. 697-700、2010

謝辞：本研究の一部は、2005 年度の（財）第一住宅建設協会の研究助成、2007―2008 年度科学研究費補助金（以上、研究代表者　谷直樹）、ならびに 2008 年度（財）住宅総合研究財団研究助成（主査　新谷昭夫）を受けて実施した。記して感謝の意を表します。